活動報告

# 地域で勉強会を開催している“うちらぼ”の活動紹介

会員ライフサポート部 活動報告 職場環境を考える 第64報

ライフサポート部　杉山さおり

横浜市港北区の介護老人保健施設ウェルケア新吉田で、定期的に勉強会を開催していると聞き、代表の五十嵐 由香里さんに、開催の経緯や、活動の状況についてお話を伺いました。

職場以外の人との繋がりを作る場としての活動について、5年間の活動を振り返って頂きました。

**―活動を始めたきっかけは？**

病院勤務を経て養成校で9年間教員として働いた後、老健へ移りましたが、横の繋がりがなく、もやもやしていました。育休後の不安もあったので、隣の老健とのつながり作りや他職種との意見交換のための勉強会をするために施設を借りたのがきっかけで、平成25年9月から活動を始めました。

**―“うちらぼ”の名前の由来は？**

在宅復帰、支援の役割を担う老健で働いて、在宅復帰や在宅生活を続ける方法に、家庭差というか、個人差が大きいと感じ、「利用者にとっての家ってなんだろう？」と疑問に思いました。簡単に言うと、介護度5でも、在宅復帰できる人もいれば、介護度1でも帰れない人もいることが不思議でした。なので、「家（在宅）を研究する」という意味で、家→うち、研究→ラボラリティで、“うちらぼ”としました。

**―始めた頃の様子は？**

当初、規約作成や人が来なかった場合の対応、広告の出し方、施設の承認を先にもらった方が良かったのでは？という施設側からの意見もあり、もう少し準備をしてからの方がいいのでは？というアドバイスもありましたが、開催してみると、ニーズは一緒で、2回目からの広報にも困りませんでした。

**―勉強会の頻度は、どのくらいですか？**

年3～4回、開催しています。

**―勉強会の内容は？**

半日で講義1時間半、事例検討1時間が基本的な流れですが、ニーズに合わせて運営スタッフで決めています。

参加者からの講師の紹介もあり、5年間講師に困らず、広島から講師を招いたこともあります。事例検討のケース1例は、依頼して出してもらっています。事例検討では、他職種が参加しているため、同じケースをいろいろな視点で見ることができています。ケアマネから、リハに対する要望が出たり、福祉用具関連の方から用具の紹介があったり、意見を言いやすい雰囲気が出来ています。

**―参加者の内訳は？**

平均して20名くらいの参加者で、多い時には50人になることもあります。参加職種は、PT・OTが7割、介護職やナース、ケアマネの参加もあります。摂食嚥下のテーマの時には、歯科衛生士、STの参加も多くなります。

継続して参加されている方が約2割、新規と久し振りの方が4割ずつくらいの参加状況です。当初、港北区と都筑区の予定だったのですが、遠方は千葉から参加される方もいます。

**―お子さん連れの方も多いですか？**

半分くらいです。お父さんがお子さんと一緒に参加することも増えています。

**―託児はしていますか？**

託児はなしで同室にしています。託児室になじめない子もいるので。

託児を付ける場合には、保険などの整備も必要だと思います。

**―広報は、どのようにされていますか？**

3年目から周辺の居宅、病院と連携を取れるようになり、横浜市介護支援専門員連絡協議会の会長との繋がりでケアマネへの告知をお願いしたり、横浜市介護老人保健施設連絡協議会へのFAXでのお知らせ、県士会での告知をお願いしました。病院は、PT同士の繋がりでメールやFAXで連絡しています。

**―運営は、どのようにされていますか？**

運営スタッフ2名とウェルケア新吉田のスタッフで運営しています。

会場提供、活動の承認については、ウェルケア新吉田のバックアップを受けています。

**―5年間続けて来ての感想は？**

思いの外広がりましたね。

0歳児のうちは、寝ていて勉強会に参加しやすいことがわかったり、こんな不便な場所でも子連れで参加してくれる人がいて、場所は関係ないんだなと思いました。車利用もあり、ベビーカーでバスを使っても参加してくれる人もいます。育休中の女性のモチベーションは高いと感じています。

ディスカッションも積極的で、多職種でディスカッションする場の必要性を感じます。

うちらぼから、シーティング部が立ち上がり、横浜シーティング研究会として、勉強会を開催するようになったのも面白い展開でした。

地域包括センターからSTの派遣依頼が多くあり、勉強会の参加者で依頼を受けてくれる人も出てきています。

**―今後の課題はありますか？**

当初の目的だった地域連携は図れるようになったので、今後は、この繋がりから何かを作り出して、社会貢献活動をして行きたいと思っています。

今後の課題としては、子どもを同席させることのリスク管理があります。

**―女性が働き続けることについて**

私が働いてきた職場は、どこの職場も女性を働くことを受け入れてくれる職場だったので、自分の職場は、贅沢な職場だと思います。

子育てしながら働ける場・力を発揮できる場を作れるよう、環境作りや意識改革に力を入れています。

**■編集後記**

在宅支援への疑問から、施設間の繋がりを求めて始められた活動が、子連れでも参加できる地域に根差した活動へ広がり、広く共感を得ていることを感じました。

子育てを経験したからこその視点や発想が活かされた活動は、出産を経験しても働き続けたい女性の後押しになっているのではないでしょうか。

SNSが発達した今だからこそ、人に深く関わる理学療法士として、改めてリアルな繋がりを大切にして、学び合える環境を増やせるといいのではないかと思いました。

スタッフの繋がりでロゴも作ってもらいました。

有限会社 木村義肢工作研究所

みなさまのご要望に真摯に向き合い、
生活を手助けするものづくりを提供して参ります。

〒247-0006
横浜市栄区笠間 3-40-5
TEL 045-892-5424　FAX 045-892-5424
www.Kimuar-gishi.co.jp